伊藤整全集

第五卷

伊藤整全集

5

新潮社版

編纂
瀬沼茂樹
平野　謙
小田切　進
奥野健男

鳴海仙吉・火の鳥
定価二〇〇〇円
昭和四十七年十一月十日　印刷
昭和四十七年十一月十五日　発行
著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話
東京二六〇―一一一一　郵便番号一六二　振替東京八〇八
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社大進堂

伊藤整全集
―5―
© Sadako Itō
1972. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

伊藤整全集 第5巻 目次

鳴海仙吉

読者に　八
一　鳴海仙吉の朝　九
二　出家遁世の志　二四
三　シェイクスピア談　四一
四　仙吉と学生　六五
五　仙吉街を行く　七九
六　仙吉とユリ子　八九
七　知識階級論　一一六
八　不安　一二五
九　小説の未来　一三九
十　送別会　一五六
十一　芸術の運命　一七四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十二　雪の夜語り　一八六
十三　汚れた聖女　二〇一
十四　幻燈　二二六
十五　地獄　二三〇
十六　終幕　二四九
あとがき　二六九

鳴海仙吉拾遺

鳴海講師の憂鬱　二七二
対話　二九五

火の鳥

一　むしばめる花　三一三
二　造花　三三九
三　誘惑　三四〇
四　変幻　三五一
五　火の鳥　三六三
六　渦巻　三九一
七　薔薇座　四一三
八　猿と人　四三六
あとがき　四五九

*

編集後記　瀬沼茂樹　四六一

伊藤整全集 第5巻（小説）

鳴海仙吉

読者に

鳴海仙吉とは誰か。作者自身にちがいないとあなたは思うでしょう。

とんでもないことです。鳴海仙吉は君です、あなたです。

一つ気の利いたことを言ってやろうと思う時、君は鳴海仙吉です。

この急場を何とか切り抜けようと思う時、君は鳴海仙吉です。

心の傷に眼をつぶって生きのびようと思う時、君は鳴海仙吉です。

鳴海仙吉は自殺もせず、革命もしませんでした。将来もしないでしょう。彼は飴色縁の眼鏡をかけ、鼠色のダブルの洋服を着、革鞄を持って、智慧あり顔に街を歩いています。君のように、また作者のように。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　鳴海仙吉の朝

今日は鳴海仙吉の札幌へ出かける日である。彼は朝日の射す、自分の小さな家の縁側の古椅子に腰かけて、大事そうに一本の巻煙草を喫っている。彼は外出用の、三四年前に裏がえしたフラノの服のズボンをつけ、ワイシャツを着てカラアをつけずにいる。彼はその姿のまま、この縁側のすぐ向うにある、この家と鍵の手に並んで建っている母家で朝食を済まして来たところだ。母は早くから起きて畑へ行ったらしく、見えなかった。

彼はこの三間の、隠居家に一人で暮している。食事は母家の弟夫婦や母と一緒にしている。仙吉は妻と子供二人を連れて、去年の春東京からここへ疎開して来た。その夏、戦争が終り、冬を越すと、妻の桃子は、中学二年生の梅太郎と一年生の竹二郎とを連れて、幸いに空襲の火災から免れて残った東京の郊外の借家へ戻って行った。都会生活に慣れた身体の弱い桃子は、働きものの姑の監督を受けて、ここできりきり働かされるのに閉口していた。それに都会育ちの妻や子供たちは東京への郷愁に憑かれていた。仙吉は、妻子を東京に送り届けてからこの家に戻り、週に二日札幌の学校へ講義に行き、外の日は売文の評論や随筆を書いて暮している。

彼はさっきから新聞を待っているのだが、それはまだ来ない。そのとき、彼の足もとの縁さきに弟の子供が三人現われた。七つと五つの坊主頭、それに、もっと小さい三つのおかっぱである。

「伯父ちゃん、寝坊だなあ」と七つの務が、自分の言っていることが分っているという表情を、陽に焼けた面長な顔に浮べ、仙吉の顔を批評するように眺めながら言った。

「伯父ちゃん、寝坊なんだよ」と五つの丸顔の久が、賑やかな、騒ぎ立てたい気質から、仙吉の坐っている椅子の脚を動かそうとして握って見ながら、兄の言葉を繰りかえした。

「うん」と言いながら、仙吉は煙草の灰を、久の丸い大きな頭にかからないように、気をつけて落した。

「オジチャン、ワワ」と、やっとこの頃戸外を歩けるようになった三つの恵が、まわらぬ口で兄たちを真似、目だけは一人前に利口そうに光らした。彼女はやっと首が縁側か

ら出る程であった。
三人とも伯父さんに相手になってもらいたいのである。だが、仙吉は昨夜おそくまでかかって手を入れた十五年も昔の自分の詩のことを考えていたので、この爆発物のような子供たちに応じてやらなかった。
「伯父ちゃん」と力を入れて繰りかえしたのは、二番目の丸顔のはしゃぎ屋の久であった。いつもあんなに仲よくしたじゃないか、という非難の調子があった。
「うん」と答えるだけで、仙吉は子供等の方を見なかった。食後の煙草を静かに吸いながら、彼はあれ等の古い詩を直して見たら、そこから今後また自分の詩を作るきっかけを産み出せるものかどうかを思案していたのである。
背の順に並んだ子供たちは、伯父さんが何か言ってくれるかと、暫く待っていたが、それが無駄だと分ると、つまらなそうに、それぞれモンペ型ズボンの後姿を見せながら裏庭の方へ歩いて行った。それにしても昨夜手を入れた詩はどんな風だったか、考えすぎて調子をこわしていないか、昔のものは昔のまま直さない方がよかったかしら、と思って仙吉は腰をあげ、玄関の上りかまちを横切って三畳の書斎へ入って行った。
そこはフロオリングを張った板敷である。西向きの格子窓の下の、古風な型の坐り机の上に、縁の黄色くなった古ノオトが拡げてある。その前に敷いてある黒い座蒲団に坐って、鳴海仙吉はもう一度昨夜手を入れた詩に眼を通した。

林で書いた詩

やつぱりこの事は言はずに行かう。
今のままのあなたを
淋しければ目に浮べてゐよう。
あなたは白樺の緑の美しい故郷で嫁に行き、
いいお母様になり、
日々の生活のなかに
夢みたいな私のことは
刺のやうに心から抜いて棄てるだらう。
私の言葉などは
若さの言はせた間違ひに過ぎないときめてしまふだらう。
いつか、人が皆忘れた頃に私は故郷へ帰り、
閑古鳥のよく聞える
から松の林の端れに家を建てて住まう。
草藪に蔽はれて見えなくなるやうな家を。
私は李の垣根に沿つて村道を歩き、
数々の思ひ出を拾ひ集め、

それを古風な更紗のやうにつぎ合せて
一つの物語にしよう。
すべてが遅すぎるその時になつたら、
私はきれぎれな色あせた物語を書き、
枝を洩れて月影の射す机の上に置かう。

この詩はあちこちを書き直してあった。一行目は「この事だけは」となっていたのを、何年とも知れぬ前に「だけ」を消してある。五行目の「いいお母様になり」というのは、全部二本の棒を引いて消してあったのを、昨夜彼はまた生かして見たのである。それを入れた方が、一人の青年が、その愛情をうち明けるのをためらう愛人の未来の姿として描くのに適当かどうか分らなかった。この詩にある自己放棄のロマンチックな夢にとって、この一行は不消化な夾雑物になりそうでもあり、またその女性の姿を完全にするのに役立ちそうでもあった。仙吉はそう思って、また生かして見たのだが、自信はなかった。最後の二行は、

枝を洩れて月影の射す机上に
私はきれぎれな色あせた物語を書き残さう。

となっていたのを、ふと昨夜このように直して見たのだった。物語を書いてから、机の上に置く、という方が、もっと静かな落ちついた印象になりそうであった。しかし、いま朝の明るい光のなかで読みかえすと、二十歳の青年の書いた畳みかけるような反復の調子がそこで挫けているような気もするのであった。

仙吉は左手で額をおさえて机に肘を突いた。確信を持てなかった。確信を持てない。だが、二十二三の時におれがこの詩の中で夢想していたこの故郷へ帰って暮すという生活に、とうとうおれは立ち到ったわけだな、と彼は思うのであった。仙吉は、それに続いて、茂木ユリ子のことを考えた。仙吉は二十二三歳の頃、友人の茂木篤の妹だったユリ子のことを考えながら、この詩を書いたのであった。そして、それから十五年あまり経って仙吉が空襲下の東京から村へ逃げ戻ると、ユリ子も戦争で夫を失い、女の子を一人連れた未亡人として村に戻って来ていた。

むかし彼は茂木篤の家で、ユリ子やその姉のマリ子と遊んだ。歌留多をとったり、トランプをしたりした。ユリ子は、いつも自分の内側に引っ込んでいるような、ひどく内気な娘であった。トランプに負けても勝っても、少し微笑し、蒼白い頬にちょっと赤味がさすだけであった。人形をつくったり裁縫をしたりしていて、家に引っ籠っていた。姉のマリ子は性格が派手で、出好きで、おしゃれであった。

マリ子は十八でユリ子は十六であった。仙吉はマリ子と恋愛遊戯めいた交渉を持つようになった。マリ子と映画を見に行ったり、海水浴に行ったり、林檎園のすみで接吻したりした。仙吉はじりじりして、それを本気にしようとするのだが、マリ子は無邪気さとコケットリイとの混った賑やかさで、いつも仙吉をはぐらかしていた。家の中に引っ込んでいる蒼白い無口なユリ子は、彼に無縁な世界の少女のように思われた。

茂木家へ行くと、がらんとした大きな家にユリ子と女中しかいなくって、ユリ子が出て来ることがあった。

「兄さんは、今朝早く出かけましたの」

「どこですか？　学校のテニスコオトかな？」

すると、ユリ子はだまって下駄をつっかけて、長い土間のつき当りの物置へ行く。どうしたのかと思っていると、だまって戻って来て、仙吉の前に立ち止り、ちょっと微笑してから、ゆっくりと低い声で言うのだった。

「あのう、ラケットはおいてあります。釣竿が見えないようですから、釣に行ったのでしょうか」

ユリ子は小柄で、丸顔だった。笑うときも、微笑はゆっくりとその頬に現われ、ゆっくりと消えるのだった。唇から顎にかけての丸味が、無邪気な何か幼な児のような印象を与えた。

それだけの会話で、仙吉は大分長いことユリ子と話をし合ったような気がするのであった。マリ子と半日海岸の砂の上に裸で寝ころがったり、水のかけっこをしたりして遊ぶよりも、まだ子供にすぎないユリ子とかわすこういう二言三言の方が、女性の真近に居るような気のすることがあった。ユリ子のその真面目な、軟かな調子に、仙吉は、妙に軽い圧迫を覚えるのであった。それで、

「あ、釣か。じゃまた」と帽子に手をかけて引きかえすのだが、ユリ子はなかば後向きになった彼に向って、少し首をかしげて、ていねいに膝まで手が届くような挨拶をするのであった。その挨拶が終ってユリ子が頭を上げるまで待たずに、いつも仙吉は茂木家を出てしまったような気がした。

大学の最後の年の暑中休暇に村へ戻ったとき、マリ子が仙吉を林檎園へ誘った。二人は夕方出かけた。マリ子は近いうち札幌へお嫁に行くことになった、と彼にうちあけた。そして仙吉を泣かせ、自分も泣いた。そのとき仙吉は自分がマリ子を本当に愛していたような気がした。だがマリ子は嫁に行ってしまった。高等工業を卒業した茂木篤は仙台の土木建築会社に勤めていたが、マリ子の婚礼のことで来ていた。ある日仙吉は彼に逢いに行き、ユリ子に逢った。すると仙吉は、この無口な少女にマリ子への自分の感情が

移入されたような気がした。そして真面目な気持になったとき、心がひとりでにユリ子のぼんやりと白い顔に集中しているのであった。しかし彼はマリ子と恋愛をしていたのだし、その前にもマリ子の友達の正子という少女と向見ずな恋愛をしていた。そういうことをユリ子は知っている。それでユリ子を子供だと思いながら、仙吉はいつも気後れを感じていた。だが今度上京したらもう村へ戻れないだろうとその頃彼は考えていたので、何ごともなくユリ子と別れてしまうのが、淋しかった。その淋しさから彼はこの詩を書き、書いてしまうと、本当に自分の愛していた少女はユリ子だったのだと思って、ひどく感傷的になった。マリ子との軽はずみな恋愛で、本当に優しいこの少女の愛を失った人間として自分を考えた。ユリ子そのものより、この淡い悲しみの甘さを彼は忘れることができなかった。その後何年か東京にいるうちに、仙吉は、ユリ子が結婚して横浜へ行っているということを聞いた。その頃は彼も東京で桃子と結婚していたが、仙吉はマリ子のことよりもよくユリ子のことをどういう男の妻になったのかなと思い出すのだった。

いまユリ子はすぐ仙吉の近所の農業会に勤めて、そこの倉庫の端を仕切って住んでいて、朝夕に顔を合せるのだ。蒼白かった彼女は、もっと健康そうな、陽にやけた赤らんだ顔になったため、昔の夢想的な感じはないが、線のはっきりした若々しい容貌を保っていた。その小柄な丸顔の唇から顎にかけて、幼女らしい特徴のある昔の表情が笑うと現われた。彼女は三十過ぎとは思えないほど物ごとに叮寧で、おどおどして、一人前の主婦になり切っていない若妻のように、戦後のけわしい世間を怖ろしげに見ているのだった。配給物を取りそこなったりしては、

「私はまあ、何て馬鹿なんでしょう」と仙吉の母に言い、言っているうちに涙ぐむのだった。髪をきちんと結っているかと思うと、簡単服の上着の袖が綻びている。時には鼻のわきに煤をつけている。足袋に穴があいている。村の主婦たちは哀れみと軽蔑の目で、以前金持の娘だったユリ子の生活力の無さを見ているのだった。畑も作っていないから野菜物に困って、よく仙吉の母がくれてやっていた。亡くなったユリ子の夫は、会社員だということであったが、シナで終戦の半年程前に戦死したのであった。ユリ子は藤田というその亡夫の姓を名乗っていた。

自分の詩の対象になるような女などは、今は生きにくい世の中なのだなあ、と鳴海仙吉はユリ子の生活を見ていて思うのであった。彼は自分の詩の中にいるユリ子は、今のユリ子とは別な人間であったような気がするのだ。今ではユリ子は戦死者の妻であり、母親であり、生活に自信のな

い主婦であり、仙吉や母に厄介をかける隣人であった。それ等の条件が昔の彼女の姿を蔽い埋めて、この詩の情感をはかない夢のようなものとしか思わせなくなっている。仙吉はユリ子のために、扶助料のことや、保険金のことや、食料のことなどで相談を受け、世話を焼いてやる。だが彼女のことを歌った詩をこうして長い間しまっていて、夜遅くまで筆を加えたりしていることは口に出さない。

鳴海仙吉は、文芸評論家として、英文学や仏文学の翻訳家としてこの十五年あまり東京で生活して来たが、はじめは詩人になるつもりだった。仙吉は中学生の頃から詩を作り、詩人以外のものにはなるまいと思っていた。大学の文科に籍があった頃、彼は学校へはろくに出席せず、若い詩人たちと交際していた。彼は自分の詩を整理して二冊のノオトブックに清書し、一冊には「雪の道」他の一冊には「李咲く村」という題をつけた。彼はその「雪の道」を二百部ほど自費で印刷して出版した。郷里から送られて来た授業料で印刷費を払ったのだった。その詩集は、その頃出ていた詩の雑誌で二三の賞讃的な批評を受けた。ある先輩の詩人が、仙吉は新しい詩壇の希望であるという手紙を呉れたりした。彼はそれで、もう詩人として一人前になった気持で、頼まれるままに四篇か五篇の詩を残ったノオトの中から写して雑誌に発表し、大学の授業料は払わなかった。そして一年ほど経って見ると、彼は、詩の稿料では生活できず、学校を除名になっている自分を見出したのだった。

腹を立てた父は、絶縁同様にして送金してくれなくなった。彼は翻訳をし、文芸批評を書き、新しい詩論を主張する原稿など書いて原稿料を稼ぎはじめた。すると詩の泉が涸れてしまったように、彼は一篇の詩も書けなくなった。彼の評論や研究が批評で悪口を言われるのは、彼は比較的平気だった。こんなものは売文だ、何とでも言うがいい。彼は原稿で生活する為には、外国の新しい文芸思潮を紹介しなければならなかった。彼は十九世紀から二十世紀にかけてのサンボリスムの詩論を否定し、ヴェルレエヌやイェエツやメエテルリンクなどの詩は過去のものだと言った。そしてその頃第一次世界戦争後の欧洲のヒステリックな若い詩人の唱え出したダダイスムや、超現実主義の詩論を紹介した。ジャン・コクトオやガアトルゥド・スタインやエズラ・パウンドやブレエズ・サンドラルスなどの実験的な詩の、翻訳できないような言葉の綾を、ことさら翻訳したりして、先輩の詩人を苛立たせ、伝統的な日本の文芸思潮に挑戦した。そういうことをしなければ、先輩のひしめき合っている文壇へ、彼のようなものが割り込む権利は無い、と彼は思ったのであった。そうすると彼は方々からの非難攻撃の的になったが非難されればされるほど彼は新しい詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com